

中川運河における多元的使い方のすゝめ

○中川運河の使われ方の変遷

かつて、中川運河は水の推進力を利用した運送路として存在していた。兩岸には工場や製材所などが立ち並び、河川と建物とが密接に関わりを持つ空間であった。時代が進み運送路としての役目を終える頃には、周辺を高層ビルやアスファルトに囲まれ、密接に関わり合っていた空間は消え去り、都市の中にぽつんと中川運河だけが取り残された。現代になって、雑然とした都市の中に癒しを求め、中川運河を眺望の場として活用しているが、どこか一元的な関係性に感じる。中川運河の新たな到達点とは、運河と人との多元的な関係性をもつことではないだろうか。

○都市のヴォイドとしての中川運河

周辺がアスファルトや高層ビルに覆われた時、中川運河は都市の中のヴォイド空間となった。それは、都市の中で特別な空間を意味する。野鳥の通り道、海から流れる潮風の道、遮蔽物のない日当たりの良い水面、高い護岸に囲まれたひっそりとした空間、左右対称の線状の大地、捉え方によって、中川運河と多元的に関わりを持てる。

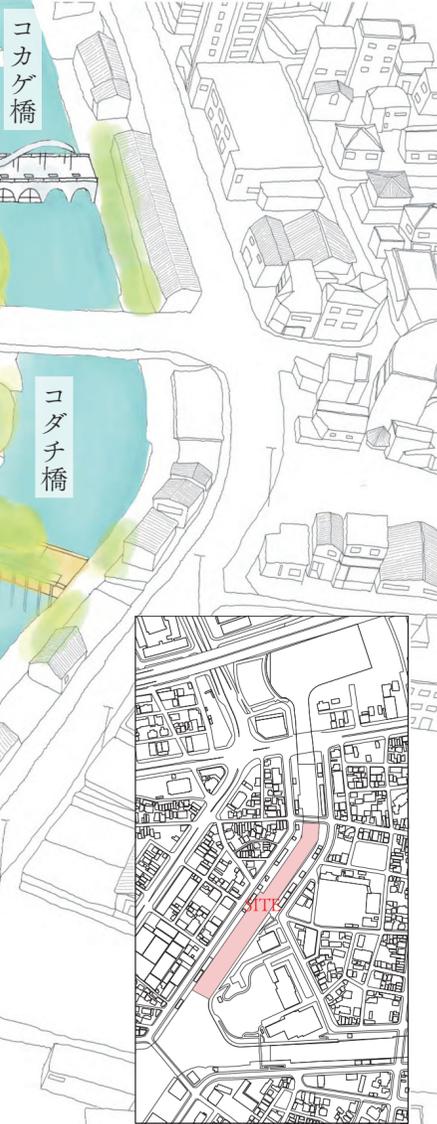


○中川運河のこれからの使い方

中川運河の様々な可能性を表に引き出したにぎわいエリアに配置されたこの橋は、点と点を結ぶようにネットワークを構築する。運河の横に沿うように配されたプロムナードのような一元的な関係性ではなく、運河と様々な軸で多元的に関係を構築する「橋」が並び、レイヤーのように折り重なる。それは、中川運河の新たな到達点となり、中川運河と都市で過ごす人々との共生の一助となる。

○「橋」という空間の可能性

中川運河の景色を記録に残す時、橋の上から写真を撮ることが多い。それは、橋が運河に最も近く、運河を最も感じる場所だからではないだろうか。水の上のようで、水の上でない。陸の上のようで、陸の上でない。そんな曖昧な橋という空間は、運河と多元的な関係性を持つ上で、重要な場所であると感じる。今までのように、埋め立てて暴力的に活動場所を拡大するのではなく、橋を活動場所にすることで、運河の可能性を引き出す場所となるだろう。橋とは、ただ対岸に渡るための場所だけでなく、橋下、橋上をつなぎ、豊かな居場所を作る場所にもなる。



2F: ビロティ
1F: ギャラリー

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

コカゲ橋

用途: 美術館

両岸の茂みを抜けた先に、ひっそりと佇む美術館。静かな鑑賞体験。

1F: 庭園

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

コダチ橋

用途: 農園

野鳥や虫の生態系との結節点となる庭園。共有農地で、小さな会話を生む。

2F: 屋外テラス
1F: レストラン

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

カオリ橋

用途: 飲食店

暖かな水面が優しい食事を提供する。キッチンから伸びる煙突は、レストランの印。

2F: 開架
1F: 開架

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

ユラギ橋

用途: 図書館

橋上に貼られた膜は、心地良い風を受け止める。ゆったりした読書時間。

2F: 広場
1F: プレイパーク

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

ハダシ橋

用途: 公園

水辺の遊び場。水面に浮かぶプレイパークは裸足で駆けたくなる。

2F: 客席
1F: ステージ

高さ: 4メートル
幅: 8メートル

シラベ橋

用途: 舞台

シンメトリな運河の空間に浮かぶ仮設ステージ。アーチの中で音はこだまする。

ひっそり囲まれた空間としての使い方

曲面屋根は隙間風を対岸に運び、人を誘う

天窓から差し込む陽、作品の日向ぼっこ

生き物が集まる場としての使い方

運河の水を上へと運ぶ井戸とパイプ

橋下は動物、風たちの主要道路

日がよく当たる場としての使い方

橋上のテラスは、料理の匂いを風に乘せて周囲に運ぶ

橋の架構は、陽をたくさん受け入れる大きな窓となる

心地良い風が吹く場としての使い方

水に浮かぶ空間では、静かな時間を過ごせる

水辺の遊び場としての使い方

橋上から水へと向かって折り返す滑り台

栈橋は水に気軽に触れる場所となる

シンメトリな空間としての使い方

普段は体験できない橋上からの鑑賞体験

小舟が観客席となる